

3つのパズル解きとしての研究

— 素人的研究の方法

宇田川 元 一

キーワード：経営学研究，研究の方法，素人的研究，対話

1. はじめに — 「素人の研究者」として

私は自分をずっと「素人の研究者」だと思っている。その意味するところは、確固たる確立された方法を持たず、また、問題意識も既存の経営学領域におけるものほど体系化されてもいないということである。自分の研究は、どうしても既存の経営学研究の枠組みから下手にはみ出してしまし、その結果、あまり経営学の用語を用いずに経営を論じるということになってしまふことが多い。まさに、素人である。

私は元々、経営学説史研究を行いながら、経営という現象を捉える上で新たな視点を構築することを目指して研究をしてきた。経営学説を紐解き、この研究者・学説群は一体どういう観点をどのように撚り合わせながら、一つの学説を構成し、何を主張しようとしているのか、そのようなことを読み解く作業が経営学説史の研究のひとつのやり方であると言えるかもしれない。

一方で、私は自分がこれこそが経営現象を見る上で論じたい点であると考えたことについて、独自のコンセプトを構築するべく悪戦苦闘してきた。とりわけ、30歳代はGergen(1999)などが基盤となって展開された社会構成主義に基づくナラティブ・アプローチの諸研究や実践に興味を持ち、この思想と実践とをどのように経営学や経営実践に

取り入れられるだろうか、どのような実用性があるか、という点について考え、学会の他、社会に対しても発信するようになった。

まだまだその独自の方法の確立などと呼べるような代物になったとは言えないのは言うまでもないことだ。私の研究は、およそ体系性を欠いているとの批判は免れないだろうし、厳密性もないと言われても反論の余地はない。だが、独自の手触り感や視点の面白さ、視点の意外性が結果として若干はあると感じている人がいることを願いたい。

では、どうしてこのような研究を行うに至ったのだろうか。もとより周りに合わせて行動することに不器用で、自分の感覚が伴わないことを行うことが苦手な私のような人間にとって、学問するということは、難しい適応を迫られる実践の積み重ねであった。加えて、子供の頃から周りに合わせることに苦手であったことや、零細企業の経営者の息子として生まれ、バブル崩壊後に父が病で亡くなり、悲惨な敗戦処理を経験した私には、自分の実感を伴わないことを研究することはどうしてもできずに来た。このような不器用な素人の研究者として、しかし、それでも大学に職を得て、研究者として日々研究に勤しむに至る過程では、得た知恵もあったかもしれない。そして、その過程で得られた知恵が、今のような研究に至る理由ともきっと不可分につながっているのだろう。

このような人間が研究の方法について語るなど

おこがましい。だが、だからこそ、これから研究を始めようとする人たちに対しては、多少なりとも参考になることを述べることは可能かもしれないとも思う。そこで、素人の研究者の方法として、私がこれまでに考えてきたことをここにおいて、躊躇いながらも共有したいと思う。

2. 精神と研究 — 阿部謹也の考察から

私は自分の元で研究をすることを志して来る社会人大学院生の人たちに、10年ほど前から一冊の本を読んでから研究テーマを考えてほしいと最初をお願いしている。それは、歴史学者の阿部謹也氏が書いた『自分のなかに歴史をよむ』（阿部、1988）である。同書は、中世ヨーロッパの人々の生活史という、歴史学において極めて独自の研究領域と方法を確立した阿部が、自分がその研究に至った過程を描いた、いわば阿部の精神史を著したものである。

この本には、阿部が中学生の頃に修道院で生活をしたことを通じて、「ヨーロッパ」なるものに触れたこと、そしてその「ヨーロッパを理解するとはどういうことか」ということを自分が探求するテーマとして、徐々にその内に萌芽していったこと、そして、35歳の時に、それまでの研究と自分の内なるテーマからの呼び声に応答するように、ドイツへと留学して新たな研究の道を探ったことなどが書かれている。

この本の中で私にとって印象的な文言が2つある。いずれも、阿部の所属したゼミナールの指導教員であった上原専祿が阿部に語りかけた言葉であった。ひとつは、大学で卒業論文のテーマについて考えようとした時に上原から掛けられた言葉「どんな問題をやるにせよ、それをやらねば生きてゆけないというテーマを探すのですね」（前掲書：18）というものである。そこから数ヶ月、阿部は悩み続けるが、なかなかそれに答えられるようなテーマは出てこない。だが、その後もこの問いは残り続け、独自の研究を生み出すことへとつながる。

もうひとつは、「解るということはそれによっ

て自分が変わるということでしょう」（前掲書、21）である。この言葉を受け、阿部はこう述べる。「何かを知ることだけではそうかんたんに人間は変わらないでしょう。しかし、「解る」ということはただ知ること以上に自分の人格にかかわってくる何かなので、そのような「解る」体験をすれば、自分自身に何かしかは変わるはずだとも思えるのです」（前掲書、22）。教育学の領域で学習論を構築した佐伯胖は、その著作『学びの構造』の中で、「おぼえること」と「わかること」の差異について論じる（佐伯、1975）。おぼえたことは忘れるが、わかったことは忘れられない。それは知が身体化されたという言い方もでき、また、その人の生きる意味のネットワークの中に知識が位置を得たことを意味するだろう。別な言い方をすれば、新たにわかった世界という地平を生きることの意味するとも言える。つまり、阿部が上原から得たこの「解る」ことで自分が変わるということの意味は、何か学問上の知識を覚えていくことではなく、それを自らの生きる世界と接続しようと試みることで、その新たな知と知、そして、生とのつながりを構築することであったのではなからうか。

そのように考えるならば、研究することは、その人と隔絶した知の世界を知識として体得することよりも、むしろ、その人が新たな世界の地平を生きようとする営みそのものであるとも言えるだろう。このことは、近年における知の存在論や認識論を巡る様々な議論と通じる問題であり、それらについて述べれば、これはまたひとつの研究として確立させることは可能である。しかし、敢えてここでそこには踏み込まない⁽¹⁾。ただ、ここにおいて述べたいことは、研究するとは、何か知識を得るためではない、研究するとは、私が研究を通じて新たな世界を、新たな生の物語を体得し、異なる存在へと変わる学びの過程である、ということである。それはよほど個人的ではあるが、同時にまたそれは、研究という営為が本来持っている社会的なものでもある。

3. 研究における3つのパズル解き

私の父は零細企業の経営者であった。自ら小さな会社を設立し、自負を持って働いていたことは、幼い頃の私にも記憶に残っている。私の家は、バブル崩壊までは羽振りもよく、一家もある程度裕福な暮らしをしていた。しかし、私が中学生の頃にバブル経済が崩壊し、金融機関にバブル期に貸しこまれた多額の借金が残され、その後の私の家族の生活は極めて苦しいものになった。

私が博士後期課程に在籍中に、父のガンが一時期落ち着いていたと思ったら急に悪化し、父はそこからあっけなく亡くなってしてしまっただ。莫大な借金が残された私と家族は、父のバブル経済における「敗戦処理」に明け暮れた。父のガンの発覚から、父の死に至る間は5年間ほどであったが、その過程は私自身も精神をすり減らす日々であった。

私は精神的な意味で生き延びていくために、自分を自分で助けなければならなかった。その中で出会った本はいくつもあるが、色濃く印象を与えたのは、臨床心理家である Milton Erickson のセラピーをまとめた、『私の声はあなたとともに』(Rosen, 1982) である。この中で、Erickson は、人間は実際には無意識下において様々なことを行う能力を既に有しており、問題に直面してもそれらを解決する能力を有している。しかし、それらの殆どは、意識に制約されて活用されることがないことを指摘する。そこで、Erickson は、言語的な介入を通じて、それらの無意識下に有している様々な能力を発揮させて問題の解決をしていくのである。その鮮やかな知性から照らされる思索は、私の精神を支える力になった。無論、Erickson のこうした実践はあまりに操作的ではないか、という批判もあるだろうが、一方で、言葉というものの力を初めてこの時に私は知った。ここから、人間存在と言葉の関心に興味を持つようになった。とりわけ、私が経験した苦境は、組織としての金融機関の倫理的な問題と強く関係している。つまり、組織における人間存在が、私の

立場から見れば倫理性を欠く行為に至らせるのはなぜなのか、組織というものは何なのか、そのことを解きたいと思うようになった。

しかし、その中で、既存の経営学の様々な研究は(単に自分が不勉強だったのだが)、当時の自分にはあまりピンとこなかった。だが、その中で大きな興味を惹いた研究があった。それは Weick の『組織化の社会心理学 第2版』である(Weick, 1979)。彼は、組織を生成する行為として捉える新たな存在論と認識論を提唱することで、現代の組織論研究の基盤を構築した偉大な研究者であったということは後から知った。「適応が適応可能性を排除するのはいかなる状況においてか」という論点を提示し、組織のパラドクスとジレンマを描くその理論は、まさに自分たち家族が今直面している問題をもたらし組織の問題を解き明かすヒントがあったように感じ、大いに魅了された。大学生の頃にこの本に出会い、この複雑だが魅惑的な理論を理解したいと思った。そのためにはどうしたら良いかを考えたところ、参考文献を辿ることで理解を深めることができると分かった。

そこで、その参考文献でもとりわけ重要そうなものから少しずつ読み進めることにした。すると、それらの文献が依拠している文献があることもわかってきた。つまり、何らかの理論というものは、単にその研究者のひらめきによるものではなく、それまでの研究の樹形図のような流れの中に位置づけられると分かった。同時に、Weick (1979) の天才的な理論展開は、単にひとつの研究群ではなく、異なる研究群をつなぎ合わせ、そのネットワークの構造が特異なものであるが、説得的でもあることに依るものだと分かった。それら全てをここに記すことはできないが、例えば、Weick (1979) は、主に Festinger (1957) の認知的不協和、Marton (1948) の予言の自己成就のモデル、Cohen, March and Olsen (1972) の意思決定のゴミ箱モデル、Garfinkel (1967) の現象学的社会学、Watzlawick, Weakland and Fisch (1974) のシステム理論などをもとに理論構築をしていることが段々と見えてきた。こうした理解

が深まる過程は、パズル解きのような面白さがあった。それは、2つの意味でのパズル解きである。ひとつは、理論的なパズル解きであり、もうひとつは、私が置かれている日々の苦しさがいかなるものなのかが解るためのパズル解きであった。私にとって、理論を研究することは、まさにこの2つのパズルを解くことだったのだ。

だが、そうして自分なりにある程度2つのパズルが解ったものの、素人的研究者である自分が満足することはなかった。なぜならば、父の死後、私に必要なものは、自分が経験した苦しさのメカニズムが解ることと同時に、その状況をなんとか生き延びることと、そうした状況を二度と繰り返さないように企業社会を少しでも変えていくことだったからだ。つまり、私には3つ目のパズルが手元に残されていたのである。それは、今私が生きているここにおいて／ここから企業社会の変革の実践はいかにして可能か、臨床の場に立ってもう一度自分の研究を問い直し、再構築するというパズルであった。

自分の研究者のキャリアで見れば、2つ目までのパズルに、大学院生や助手の時期、そして、九州において2つの大学で合計9年間在籍した時期に取り組んできた。しかし、3つ目のパズルはやはり実践に踏み込まなければ決して解くことができない。そんななか、Denning (2003) の翻訳に一部携わったり、あるいは、Gergen (1999) を学んだりしたことを通じ、語りによって新たな現実を生成する臨床的研究領域であるナラティブ・アプローチに出会うことになった。この臨床的な場における様々な知見の発見は、私にとって極めて大きなインパクトがあった。単に知として、理論として、現実がどのように生成するのかというメカニズムを知るにとどまらず、現実が立ち現れる姿に触れることができるからである。まさに、この3つ目のパズルを解くことに繋がる気配を感じたのである。

とりわけ、西南学院大学在籍時に、浦河べてるの家の創設者である向谷地生良氏の講演に触れたことは強い印象を受けた。浦河べてるの家は、北海道浦河町にある精神障害ケアのコミュニティで

ある。統合失調症など、精神医療においては重度の精神障害に分類される人々が共に仕事や生活をし、当事者研究という、精神障害を持つ当事者による独自のミーティングを重ねる。それまで、精神障害者は治療の対象者という印象を漠然と持っていた私にとって、自分たちが当事者性を有しながらコミュニティとしてケアを重ねていることに驚き、また、その中で語りの持つ力の大きさに衝撃を受けた。それまで学んできたナラティブ・アプローチにも通じる独自の実践を築き上げて、大きなインパクトを打ち出していることを目の当たりにしたのである⁽²⁾。べてるの家の思想や実践に触れる中で、これは単に精神障害当事者にのみ意味のあるものではなく、この思想や実践は、本来的に変革的な力を有していると感じた⁽³⁾。だが、ここで得たインパクトを2つ目のパズル解きに留めずに、3つ目の臨床的なパズル解きに挑むにはどうすべきだろうかと考えるようになった。

同時に、研究というものの在り方についても、べてるの家の「当事者研究」からは大きな示唆が与えられた。精神障害の当事者は、精神医学や心理についての専門家ではない。しかし、自分の病気については専門家である。ただ、それは研究という枠組みにあって専門家になるのである。では研究とは何か。当事者研究は、自分の病気について当事者本人や仲間と語る方法である。その中で、自分の幻聴に対し「幻聴さん」などの名前をつけ、幻聴さんがどのような時にどんなことを言うか、などについて話し合う。その過程を通じて、幻聴さんがどのような自分の状況の中で、周りとの関わりの中で、どのような姿を表すのかが明らかになってくる。その過程は、まさに研究的であると言える。

ここでいう研究とは、「事象や実践に対して、そこに没入することなく、観察的・認識的な態度をとること」「事象に対して能動的に働きかけ(実験を行い)、その結果を観察することによって認識を得るということも含まれる」(石原, 2013: 58-59)。つまり、一度、ものごとを対象化し、それについて、様々な角度から眺めながら認識を新たにすることが、ここでいう意味の研究なのであ

る。そして、それは当事者としてその問題に関わることを通じて行うことができる研究なのである。

2016年から埼玉大学に研究の場を移し、この3つ目のパズルに本格的に取り組もうと思うようになった。すなわち、どのようにしたら企業は変革できるのか、臨床のフィールドを持ちながら、そのことに取り組むということである。様々な理論の理解、現象とのレレバンスの確立は研究において非常に重要である。それらと一瞬の積み重ねである経営組織の日常における実用性とをどのように結びつけるか、ということは、時に自分が全くそれに対して無力であることに向き合う営為でもある。だが、こうした臨床的な関わりを通じて、今まで学んできた理論に新しい方向から光が当たり、これまでに考えてきたことの意味を深めることもできたように思う。もっと言うならば、自分が何を研究してきたのかが新たにされる、対話的な場が臨床のフィールドであったように思う。

4. これから研究をする人に

この文章は、主に社会人でこれから研究を始めようとする人々に向けて書いている。これまで私書き連ねてきたことを敢えて整理するならば、下記の3つにまとめられるだろう。

- (1) 学問領域の体系的な理解の構築
- (2) 学問的知識と組織現象との関連性の発見
- (3) 上記2つの実践上の意義の探求

1つ目の点について、何よりも、それまでの学問領域の知識を体系的に理解することは不可欠である。つまり、まずは「おぼえる」ことも必要であろう。ただし、その体系は、全く軽視すべきではない一方で、思ったよりも確固たるものではない。むしろ、その体系を理解するとは、自分なりにその体系を編み上げることを意味すると言って良い。つまり、「わかる」ことが目指すところである。そのためには、文献を読むことは当然ながらも、より重要なことは文献間の関係性を独自に構築することを忘れてはならない。我々は読むこと

に甘えて、時にこの関係性の構築を疎かにしてはならない (Bayard, 2007) ののである。

2つ目については、問いを持って対象を見ることは不可欠である。社会人で研究をしようとする方は、少なからず実務上の問題意識を持ってくる。その時に、「こういう問題を解決する方法を見つきたい」という実務からの問いをダイレクトに持ってやって来ることは少なくない。確かに、その問題解決に向けた意識は大切である。ただし、研究するとは、問題との対話の過程を含むものである。では、問題との対話とはなにか。それは、先に当事者研究について述べた箇所で考えたように、問題と一度距離をとって (対象化して) 眺め、その問題について多面的な側面を知ることである。問題は最初、様々な角度から眺める前はひとつの顔をして現れる。それを解決せよと迫ってくる。だが、その問題の最初の声に翻弄されると、問題の多面的な顔を知らず、表面の問題に対して解決を図ろうとする。ここに問題との対話の意義がある。研究は、たしかに最終的には一人で行う側面が多いだろう。とりわけ、理論的な研究はそうだが、大学院などの共同体における議論を通じて、他者の視点を借りることで、問題を対象化して眺めることが可能になり、問題の全く違う姿を知ることもある。その時に、1つ目の研究で読みながら構築してきた知のネットワークが、その違う姿を発見する上で有用になることもあるだろう。つまり、ここにおいて、研究するとは、研究的な知見を踏まえて、当初の自らの知っていた問題と対話をすることを通じて、新たに問題を発見することなのである。それによって、知のネットワークと問題との新たな関係が構築される。

3つ目はそれまでと少し位相が異なる。(2)までの領域が純粋に研究的な知と現象との関係の構築であったのに対して、実際の研究者が置かれている状況に一度これらを戻してみても、(2)までで考察してきたことがいかなる意味を持つのかについて、実用的視点からその知の意味を捉え直すものである。実用的 (pragmatic) というのは、必ずしも企業の利益に貢献するとか、そういう社会に既に存在する変数に対する実用性に限定されない。そ

の状況ごとに立ち現れる様々な課題に対する効果という観点から、構築してきた知の意義をひとつひとつ審問し直す過程である。社会人が研究をするという文脈でこれを考えるならば、一度、大学院という世界に場所を移し、アカデミックな観点から実務の中で感じてきた問題を捉え直し、その中での考察からの結論を導き出したあと、再び実務の文脈に戻ってその自らが見出した結論の意義を検討するという過程だと言えるだろう。言い換えるならば、これは臨床のフィールドに立って、実践的な研究者として研究をすることを意味する。この時に、さらに知の新たな姿を知り、そのことを通じて、生きる世界の物語の変容を知るに至るだろう。自らの生きる物語の変容こそ、研究をすることを通じて得られる、誰に評価されるわけでもないかもしれないが、素晴らしい成果なのではないかと思うのだ。

5. おわりに

冒頭に、私は自分を素人の研究者だと書いた。その思いは、この文章を書き連ねていくにつれてなお高まるばかりである。素人には芸がない。だが、白い人という意味も元々はあると聞く。また、文字をそのまま読めば、素（す）の人という意味でもある。

自分というキャンバスは、白いほうがいい。常に、そこに何が描かれるのかが待たれている存在として、何かに出会う中で、私を通じてそこに何かが描かれる。その時に、今までに知りえなかった私を知るだろう。そのためには、予断を持たず、素の人であったなら良い。無論、我々はいくら予断を持たず生きようとしてもそのようにはできない。一度塗られたキャンバスは決して元の白さに戻ることはない。だが、その中であっても、常に発見に拓かれた存在でありたいと思うのである。研究を通じて私が新たに発見されるのだから。

《注》

- (1) こうした問題については、例えば Quine (1951) の経験主義への批判, Polanyi (1958)

の知への保守思想的でありかつ物語的側面の彫琢, Bruner (1990) による物語と人間存在との不可分性についての議論, Toulmin (2003) の合理性 (rational) と理性 (reasonable) についての論考, Gergen (1999; 2011) の関係的な存在論からの一連の論考などが挙げられるだろう。

- (2) べてるの家の取り組みについては、浦河べてるの家 (2002) などに詳しい。
 (3) 詳細については、宇田川 (2016) を参照のこと。

参考文献

- 阿部謹也 (1988). 『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房
- Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. San Francisco, CA: Chandler. (佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社, 2000年)
- Bayard, P. (2007). *Comment parler des livres que l'on n'a pas lus?* Éditions de Minuit. (大浦康介訳『読んでいない本について堂々と語る方法』筑摩書房, 2008)
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Mass, Harvard university press. (岡本夏木他訳『意味の復権 新装版』ミネルヴァ書房, 2016年)
- Cohen, M. D., March, J. G., & Olsen, J. P. (1972). A garbage can model of organizational choice. *Administrative science quarterly*, 1-25.
- Denning, S. (2007). *The secret language of leadership: How leaders inspire action through narrative*. San Francisco, CA: John Wiley & Sons. (高橋正泰・高井俊次監訳『ストーリーテリングのリーダーシップ』白桃書房, 2012年)
- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Stanford, CA: Stanford university press. (末永俊郎訳『認知的不協和の理論 — 社会心理学序説』誠信書房, 1965年)
- Garfinkel, H. (1967). *Studies in ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall. (山田富秋他訳『エスノメソロジー — 社会学的思考の解体』せりか書房, 1987年)
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage. (東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版, 2004年)
- Gergen, K. J. (2011). *Relational being: self and community*. NY: Oxford University Press. (鮫島輝美・東村知子訳『関係からはじまる』ナカニシヤ出版, 2020年)

3つのパズル解きとしての研究

- 石原孝二「当事者研究とはなにか ― その理念と展開」
(石原孝二編著 (2013)『当事者研究の研究』医学
書院 第1章)
- Merton, R. K. (1948). The self-fulfilling prophecy.
The antioch review, 8 (2), 193-210.
- Polanyi, M. (1958). *Personal Knowledge: Towards a
Post Critical Philosophy*. London: Routledge.
(長尾史郎訳『個人的知識』ハーベスト社, 1985
年)
- Quine. W. V. (1951). Two dogmas of empiricism.
The philosophical review, vol. 60, pp. 20-43. (飯
田隆訳「経験主義のふたつのドグマ」『論理的観
点から』第2章, 勁草書房, 1992年)
- Rosen, S. (1982). *My voice will go with you: The
teaching tales of Milton H. Erickson*. NY: Nor-
ton. (中野善行訳『私の声はあなたとともに ―
ミルトン・エリクソンのいやしのストーリー』二
瓶社, 1996年)
- 佐伯胖 (1975). 『学びの構造』東洋館出版社
- Toulmin, S. (2001). *Return to reason*. Cambridge:
Mass, Harvard University Press. (藤村龍雄訳
『理性への回帰』法政大学出版局, 2009年)
- 宇田川元一 (2016). 「言語システムとしての組織：ナ
ラティブ・アプローチの組織論研究に向けて」
『経営哲学』13 (1), 18-30.
- 浦河べてるの家 (2002). 『べてるの家の「非」援助論』
医学書院
- Watzlawick, P., Bavelas, J. B., & Jackson, D. D.
(1967). *Pragmatics of human communication*.
N. Y.: W. W. Norton. (山本和郎監訳『人間コミュ
ニケーションの語用論 ― 相互作用パターン, 病
理とパラドックスの研究』二瓶社, 2007年)
- Weick (1979). *The social psychology of organizing,
second edition*. NY: McGraw-Hill. (遠田雄志訳
『組織化の社会心理学 第2版』文眞堂, 1997年)